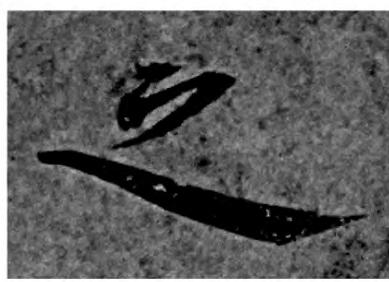


主図版①『高昌墨書墓誌・集字』



「書の古典観照」⑧

「高昌墓表」②

張猛龍碑



馬鳴寺根法師碑



高貞碑



『徐寧周妻張氏墓表』（墨書）は、延昌四年（515）であり、同じ地域から出土したほぼ同時代の墨書墓誌をもとに、六朝書法の特徴ある転折、横画の起筆、終筆、更に右下への払いを中心に、ほぼよく似た字形の文字を集字したのが、右頁の主圖版①である。「月」「日」「四」字の右肩の転折は、横画の末を止め、鋒先を調えて右下方に転じ、縱への筆を進めるために大きく筆勢を調整し、筆先に力をため込み、大きく下方に鋒先を押し出している。明確にこうしたリズミカルな筆勢を示すものもあれば、一気に方向転換をして下方にダイナミックに転換するものもある。横画の起筆も力強く、一旦筆を止めてから右に押し込み、大きく下方に鋒先を軽くサッと起筆から送筆に移るものもある。斜め右下への払いも伸びやかに抑揚を付けるものもあれば、大きく太く押し出し、一旦筆を止めてから押し出すものもある。まさにそれぞれの書き手の個性の相違を見ることができる。こうした特徴は、同時代の碑刻である「張猛龍碑」（522）、「高貞碑」（523）、「馬鳴寺根法師碑」（523）などにも見ることができる（図②）。石刻文字と墨書の相違はあるが、転折や、起筆、送筆、終筆、右払いなどの特徴には、共通したものがある。

伊藤滋（書齋名・木鷄室）

書道芸術院 平成の群像 (2018)



第70回記念書道芸術院展 「巡拝の歌(自作の歌)」

矢原春窓書

この長い書の道程
で出会った多くの師
や書友・場面・空間
は、私の人生の貴重
な宝物です。

熟でお恥ずかしい限
りですが、これから
も時には自分の歌を
素材にして、書を楽
しみながら筆を持ち
続けたいと思ってい
ます。

第25回書道芸術院展に初出品したのは入
門2年目でした。「精養軒」の表彰式で香
川峰雲先生から入選代表の賞状を戴いた瞬
間は、今も鮮明に脳裏に浮かんで参ります。
遠い日、大正5年生まれの母が「甲・乙」
等と朱墨で添削されたボロボロになった半
紙や、淨瑠璃の教本を練習した草稿を大切
に保管していく、私は興味津々見ていまし
た。

私は三児を抱えた共働きでしたが、その
間は、今も鮮明に脳裏に浮かんで参ります。
遠い日、大正5年生まれの母が「甲・乙」
等と朱墨で添削されたボロボロになった半
紙や、淨瑠璃の教本を練習した草稿を大切
に保管していく、私は興味津々見ていまし
た。

「私の宝物」



矢原春窓

母と同居したのを機に、何か趣味を始めた
いと選んだのが書道でした。

縁あって長畠東霞先生の書道教室の門を
叩きました。間もなく先生の師である防府
の山田魯江先生の「鐘紡教室」に伴われ、
そこでいきなり「心如鉄石」を揮毫。その
場で「春窓」の雅号を頂いたのもつい昨日
のことのように思い起されます。

爾来今日まで不勉強ながらも、細く長い
書の道を歩むことが出来たのも、東霞先生
を始め魯江先生や宮城野書人会の先生方の
ご指導のお蔭と感謝しております。東霞先
生は私が挫折しそうな時も叱咤激励、お蔭

で「春窓」の雅号を頂いたのもつい昨日
のことのように思い起されます。

そこでいきなり「心如鉄石」を揮毫。その
場で「春窓」の雅号を頂いたのもつい昨日
のことのように思い起されます。

爾来今日まで不勉強ながらも、細く長い
書の道を歩むことが出来たのも、東霞先生
を始め魯江先生や宮城野書人会の先生方の
ご指導のお蔭と感謝しております。東霞先
生は私が挫折しそうな時も叱咤激励、お蔭

私は書の他に詩吟や登山・短歌なども嗜
んでいますが、書道がメインであることは
言うまでもありません。しかし「この道一
筋」からは逸脱していることは否めません。
この拙作は長年「弘法大師」に同行・お
遍路していく、折々に作った歌を参道に模
して七首したためたものです。歌も書も未

書人会の方々の切磋琢磨される講習会や書
展に直接触れ、刺激を受ける機会がままな
らず残念です。

私は書の他に詩吟や登山・短歌なども嗜
んでいますが、書道がメインであることは
言うまでもありません。しかし「この道一
筋」からは逸脱していることは否めません。
この拙作は長年「弘法大師」に同行・お
遍路していく、折々に作った歌を参道に模
して七首したためたものです。歌も書も未

様で院展や毎日展にも欠かさず出品する事
が出来ました。

宮城野書人会の創設者である加藤翠柳師
のモットー『愛情・寛容・実践力』の精神
は、山口支部「風信会」の教える根底にあ
り、魯江先生や東霞先生、山田梓江先生の
ご指導により今も会員の心に浸透していま
す。しかし、怠慢な私にはまだまだ程遠い
モットーであり、これからも努力を重ね少
しでも近づきたいと思っています。

書のひろば

理事長 辻 元 大 雲

創立記念日特別講演会
定例理事会併せて開催

東博学芸企画部長 富田淳氏

11月23日(金・祝)上野精養軒にて本院恒例の特別講演会が開催され、今回

は東京国立博物館学芸企画部長の富田淳氏を講師にお招きして「顏真卿と唐代の書 祭姪文稿を中心」と題して来年1月中旬より東博にて開催される特別展を前に、素晴らしいタイムリーナ講演会となつた。

当日午前には同ホテルにて定例理事会が、顧問・評議員にオブザーバー参加していただき、主に今年度事業実施報告、来る第72回書道芸術院展の準備状況、来年度の単位認定講習会(北関東総局群馬、伊香保温泉)計画などをご審議いただいた。

午後2時からの講演会は精養軒2階会場を埋め尽くす満員の盛況の中、スライド映写など具体的な資料を基に充実内容の濃いご講演であった。

講演終了後は会場を移動して創立記念日を寿ぐ祝賀懇親会が賑やかに開催され、富田淳氏をはじめとするご来賓にもご参加いただき盛会であった。各総支局からの状況報告、展覧会開催案内など各地からの情報交換もあり、得

難い内容の濃い一日であった。(詳細報告は次号にて)



講演会風景

(数量限定につきなくなり次第終了)
全日本書道連盟講演会開催

講師 日展副理事長 加藤種男氏

11月5日国立新美術館講堂にて、全日本書道連盟主催の書道講演会が開催され、今回は日展副理事長加藤種男氏を講師にお招きし、これから書の在り方、若手の育成などについても興味あるお話を伺った。

日本の書道コネスコ世界文化遺産登録推進協議会 協賛バッヂ販売へ

11月8日東京駅ステーションホテルにてユネスコ登録推進協議会理事会が開催され、本年度事業報告・決算承認などの審議を行った。役員改選に当たりこれまで会長をお勤め頂いた荒船清彦氏が定年により顧問にご就任、新会長に田中壮一郎氏が推挙された。

推進協議会の運動を盛り上げ、財源確保の意味からピンバッチの販売を行うことになった。一個500円で各書道団体へ広報、販売促進を行う。詳細は後日誌上などで行う。ご協力を。

東京オリンピック・パラリンピック競技大会開催記念「日本の書200人展」(仮称)開催へ 準備委員会開催

2020年東京で開催されるオリンピック・パラリンピックを記念して芸術文化関係の各種イベントが企画されているが、我が書壇でもオールジャパン体制で書道展を開催する構想が実現することに

特別展「顏真卿・王羲之を超えた名筆」は既に誌上にて紹介しているが、必見の展覧である。お見逃しなきよう。千年の時を超えて、激情の書「祭姪文稿」日本初公開と謳い、台北故宮博物院の秘蔵の名品の数々と王羲之から日本の書への影響までも俯瞰する展示内容である。

・毎日書道会理事・監事による本展にちなんだ大作も前後期に分けて展示される予定。(平成館一階右側の展示室にて)

・毎日書道会出品団体対象の特別観覧券発売 一般当日券160円(前売券140円)を特別料金1枚110円(10枚以上まとめ込まで、別紙申込書にて、申込書は出品各団体責任者に送付されてい)お問い合わせは院事務局まで。

・毎日取扱期間11月1日～12月20日

なった。内閣府、オリンピック競技大会組織委員会、文化庁からの要請を受けて、毎日書道会・読売書法会・産経国際書会、更に毎日・読売・朝日・産経・共同通信各新聞社の後援も予定され、正に全日本体制で行う。

会場 国立新美術館企画展示室E棟。
会期 2020年4月21日～5月10日
出品者 現代日本の代表書家200名

今後開催に向け実行委員会組織を足させる予定。乞うご協力。

全日本書道連盟代表訪問
本院より辻元・下谷両役員が参加

全日本書道連盟ではこれまで中国書法家協会と相互訪問交流を行ってきたが、ここ数年日本からの訪問交流が行われていなかつた。中書協からは蘇士樹主席はじめ協会幹部の日本訪問交流がこの5年間に3度行われている。

今回日中和平友好条約締結40周年の節目でもあり連盟を代表して、本院より辻元大雲理事長(連盟常務理事・事務局長)、下谷洋子(連盟監事)常務理事、飯田善一連盟事務局員、添乗員川野連合企画社長の4名が、北京・瀋陽を訪問した。

11月20日～22日3日間の短期訪問であるが、北京では中国書法家協会表敬訪問及び交流、情報交換など、瀋陽では遼寧省書法家協会幹部との交流、新装なった遼寧省博物館見学などを行つた。特別参觀として「萬國通天帖」ほかを拝観。得難い機会であった。

漢字(三)

飯田春香

前衛書(三)

嵯峨大拙

線と筆庄

大字書は線質の厳しさにあると思う。書は点と線によって成り立つていて短い画を点、長い画を線という。

太くて重厚な線は豊かで温かみがあるが、気をつけないと鈍くて重たい感じになる。一方細い線は澄んだ感じで爽やかで明るい感があるが、ともすれ

ば寂しく弱弱しい線になる。

又、方向性ですが水平な線は安定感があり、斜めの線は不安定になる。直線は理知的で

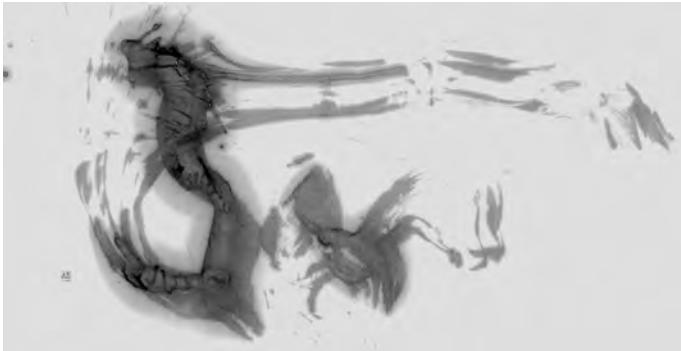
作者の意志が現れると思う。反面、曲線は感情的で暖かみを感じる。

これらを組み合わせて変化を与えることにより複雑な情感が現れる。でもそれだけで

はない。そこに筆庄が加わり、速度や、リズムも大いに関係してくる。作品を制作するにあたり、これらの要素を判断し書き進めていかなければならぬ。

未だにこれら全てを盛りこんだ作品が出来ない自分がいる。

「孤」



第25回安芸全国書展

21世紀の書

—私の主張—



第69回書道芸術院展

「眞志」

嵯峨大拙

掲載の作品は平成28年2月、第69回書道芸術院展に出品した「眞志」。書のバリエーションとして種々な表現にチャレ

ンジした。いかりの心をおさえ心の安住を得ること。縦8尺横4尺の作品である。

左直上から思い切り落筆して右に回転させ、次に右直上から思い切り落筆して左側に回転させた。その下に隸意を含む線で左側に新たに右上中央につながるためのスタート

を切った。今度は回転の連続で途中回転を止めるための直線的な線を使用して、左下にまた小さな回転が出来た。

師は筆の勢いにまかせ、運筆する

事が必要であると言っていた。墨を磨ってから10日間ほど寝かせて故意に腐らせて書いた前衛作品である。

先月号の文中の二ヵ所に誤りがありました。正しくは、
①作品サイズ 縦8尺 横3尺。
②書道の原理を実際に…
です。訂正し、お詫びいたします。

写真の「孤」は第25回安芸全国書展において有光次郎賞をいただいた作品で、「強韌な線で紙面を掌握する」との評を頂き私自身も大切にして

いる作品です。

(公財)書道芸術院

第21回・国際交流ウイーン書道展

報告

前田龍雲

去る10月23日～31日、「第21回書道芸術院国際交流ウイーン書道展」が在

オーストリア日本国大使館広報文化センターで開催された。訪欧団は10月22日～28日まで、辻元理事長はじめ11人であった。

このウイーン展は以前、本院参与会員谷脇梅翠先生がウイーン日本人学校長として赴任されたのが縁で、毎年欠かさず展覧会とのワークショップを継続してこられた。この草の根交流は昨年20周年を無事終え、本年からは全面的に書道芸術院主導で開催することとなり、院の役員作品など55点が展示された。

今年の私はまず伊丹の大阪国際空港から成田空港へ。辻元大雲理事長はじめ団員と成田で合流してブリュッセルを経由して、オーストリアの首都ウイーンに到着。ホテルチェックインは夜も更けた頃であった。まず一同は市内の

レストランで長時間移動の疲れを地元料理とワインで癒しながら今回の作業内容について綿密な打合せを行った。

翌日は朝から作品の陳列作業であった。今回は表具店が不在だったので大使館の方と我々が陳列室を全て行つた。頑丈なパネルを数枚配置し、今回から

午後からは地元の人を対象としたワークショップを行つた。聞くところによると、第1回からのリピーターがおられるとのこと。有難いとともに、はたしてその方々に満足頂けるワークショップであるのかは疑問を感じたところで

もある。経験者と初心者対象のワークショップを分けて開催するのもひとつの方針かもしれない。ワークショップ前に財団書道芸術院幹部の先生方によるデモンストレーションが行われた。瞬きも忘れて食い入るように見る参加

しかし最近は施設内のセキュリティが非常に厳しく、思うように会場風景の撮影ができなかつた。満足のいく画像があまりないことをお許しいただきたい。



陳列作業



揮毫中の辻元理事長



地元小学生対象のワークショップ

ワークショップを終了して



大人向けワークショップの模様



スロバキア大使館の方と団員



宮殿前の広場にて



翌26日の午前中、まずはドナウ河畔にそびえ立つ宮殿近くの高台から市街地を望む。広大な眺めですぐ近くにはオーストリアが見える。近代的な建物と歴史を感じる建造物が絶妙にマッチしている様は日本も見習わないといけない部分だと、ヨーロッパを訪れる度に感じる。後に徒步で旧市街地を、前日より広い範囲の散策。日本でいうところの奈良や京都のような落ち着きを

プラチスラバ旧市街地にて



者の姿が印象的。とにかく、いつも感じることであるが、「書」に関心のある方がこんなにも海外にたくさんおられることに驚嘆させられる。
24日前は地元の小学3年生約20人を対象にワークショップを行った。日本語もままならない受講生なのでどれだけ理解してもらえたかはわからないが、継続することによって徐々に興味を示してもらいい、浸透していくくれるとありがたい。

午後は一般大人向けのワークショップだった。ここにもりピーターが数人来られた。個人的な話だが、10回ほど携わっている私に会いに来たという人がいてことのほか嬉しく思った。継続

するにはやはり悪くない。夜はお世話になった大使館の方々とワイン居酒屋「ホイリゲ」で楽しく談笑した。
25日前はウェイン美術史美術館へ。丁度ブリューゲルの特別展示があり、滅多に見ることのできない2点並んだ「バベルの塔」を鑑賞できた。他にもクリムトなど名品がずらり。何度も見ることのできる「ベセルの塔」を鑑賞できた。他にも訪れても飽きることがない。向かい側の建物は自然史博物館であるが、ここも一日中いても全て見ることができないほどの陳列物がある。今回は残念ながら時間切れであった。

午後はバスで1時間ほど走り、スロバキアのプラチスラバに移動。在スロバキア日本国大使館に表敬訪問をした。

以前この地では3回ワークショップをした経験があり、今回もとの予定であったが、日程調整がうまくいかず来年に持ち越しとなつた。私は約10数年ぶりの訪問であったが、旧市街は観光化が進み人の多さに驚いた。それでもしつとりとした落ち着きがあり、どことなく郷愁を覚える雰囲気のことである。これが歴史の重みというものであろうか。聞くところによるところで「書」の展覧会は開催したことがないとのこと。是非来年は展覧会・ワークショップを実現させたいものだ。

感じる。しかしこの日はフランスのマクロン大統領が訪問しており、警備も厳しく歴史的建造物の中に入ることができなかったのが残念だった。是非来年は伺いたいところである。

夕刻、一路バスにてウィーンの空港へ。ブリュッセル経由で帰国の途に。と、ここまでは良かったのだが旅にはハブニングがつきものである。ワインから飛ぶはずの飛行機がなかなか動かない。乗客と託送荷物のトラブルで2時間以上にわたり足止め。ブリュッセルには一応夜に着いたものの帰国する便は我々を残して飛び立ってしまった。仕方なく、もちろんブリュッセル航空がホテルと翌日の便の手配をひとまずホテルにチェックイン。私以外の方はパリ経由羽田行きの便に振替えられ、私はパリ経由関西国際空港行きの振替便に乗るべく、早朝に一人タクシーで空港へ。順調にパリについたものの、またもやパリ発関空行きの便が3時間ほど遅れ！お陰!?でパリの空港にて関東組と合流でき、1時間ほどお話ししができた。時間になりそれぞれ帰国の途に。無事帰国したがそれだけでは終わらなかつた。皆さんのスーツケースはロストバゲッジであちこちに留め置きされていたようだ。私のものは2箇所の破損で使い物にならない状態、6日遅れて到着。と、まあいろいろ思い出に残る旅であった。

来年はオーストリアと日本が友好関係樹立150周年、スロバキアと日本が友

好関係樹立100周年とどちらも記念の年を迎える。海外交流ウィーン展は財団法人書道芸術院にとって重要な行事であり、今後も継続すると聞いている。

スロバキアでのワークショップも再開される。かく言う私もかなりのリピーターになってきた。が、何度訪問しても新たな発見が有り、新鮮さを欠かない。是非来年こそは何事も無くリベンジ旅行を終えたいものである。

【訪欧団】

辻元大雲理事長
下谷洋子常務理事

前田龍雲参事
小竹石雲常務理事

佐藤浩江
治田芳江

京絹子
九條純代

佐藤翠
工藤永翠

堂本曉生
(毎日新聞旅行)

月日	都 市 名	現地時間	交通機関	スケジュール	食事
10/22 (月)	成田空港集合	8:50		成田空港・第1旅客ターミナル	
	成田空港	発 10:50	NH231	全日空にてブリュッセル経由ワインへ	昼 飯内食 夕 飯内食
	ブリュッセル空港	着 15:50			
	ブリュッセル空港	発 17:50	OS534	通関後、ホテルへ	
	ワイン空港	着 19:35	専用車		<ワイン泊>
10/23 (火)	ワイン	滞在	終日	☆第2回書道芸術院・国際交流ワイン展 9:00 陳列作業(大使館広報文化センター)手伝い <※一般の方> 14:00 ワークショップ①(回目)手伝い 大使館広報文化センター <ワイン泊>	朝 ホテル 昼 × 夕 ホリゾン
10/24 (水)	ワイン	滞在	終日	基本・終日自由行動 ○オフショトルツアー(ワイン1日観光) ワーカークラブ②③回目(大使館広報文化センター) <ワイン泊>	朝 ホテル 昼 × 夕 ×
10/25 (木)	ワイン プラチラバ	午前	専用車	自由行動	朝 ホテル 昼 × 夕 ×
		午後	専用車	昼食後、バスで国境を越え20/キアへ 約1時間20分 15:30 在スロバキア日本大使館表敬訪問 (予定) <プラチラバ泊>	朝 ホテル 昼 × 夕 ×
10/26 (金)	プラチラバ	午前	専用車	プラチラバ(旧市街半日観光)	朝 ホテル 昼 × 夕 ×
		午後		観光昼食後、ワイン空港へ 約1時間30分	
	ワイン空港	発 18:10	SN2906	全日空にて、ブリュッセル経由、帰国途へ	
	ブリュッセル空港	着 19:50			
	ブリュッセル空港	発 21:10	NH232		
10/27 (土)	成田空港	着 15:40		通関後解散。	



シュテファン大聖堂

平成30年度 新審査会員作品

熊谷 桃華（運）・大窪 翠村（漢）・高橋 正子（か）・濱田 竹雪（か）

熊谷 桃華
(千葉)

「吹毛常磨」



この度は、審査会員に昇格させて戴きありがとうございます。三浦鄭衡先生をはじめ諸先生方のご指導に深く感謝申し上げます。今回の作品は（すいもうつねにます）修行に終わりなします。今後も、朝の練習を欠かすことなく、なお一層の稽古と勉強を続けて、日々精進してゆきたいと思います。

（桃華）

大窪 翠村
(鳥取)

「支」



枝を手で支える様子を表す文字の「支」。自身も名越蒼竹先生、山陰支局の諸先生方の手に支えられてきました。深く感謝致します。

魅力ある書の前では足が止まります。そのような作品をめざし、楽しみながら書作に取り組みます。

（翠村）



高橋 正子
(群馬)

「吉野山」西行



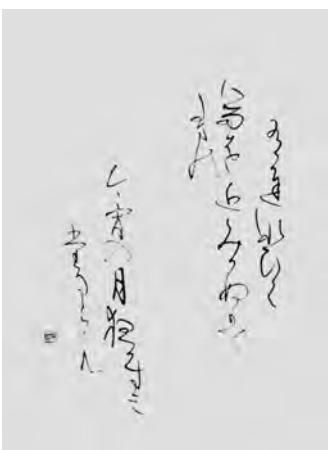
濱田 竹雪
(千葉)

「うちなびく…」

この度、審査会員にご推挙いただきありがとうございます。

下谷洋子先生に出会い、まるで音楽を奏でている様な快いリズムに魅せられ虜になりました。感動の心を大切に、自然と旅をこよなく愛した西行に習い、かな書の魅力を訊ね、研鑽を積んで参りたいと存じます。

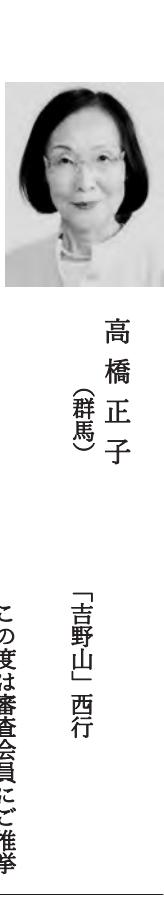
（正子）



この度、審査会員にご推挙いただきありがとうございます。いつもご指導下さる板垣洞仙先生・下谷洋子先生に深く感謝申し上げます。

しなやかで艶のある線を目指しリズム、墨の変化、余白美を意識して取り組みました。これからもかなの美を追求しより一層精進を重ねて参ります。

（竹雪）



平成30年度 新審査会員作品

永井 凤雪（現）・小野寺久美（現）・相馬 美希（前）・金井みどり（前）



永井鳳雪
(青森)

「中村草田男の句」

現代詩は、言葉に秘めた感情を書の藝術としてどう線質に表せるかだと坂本素雪先生は話されます。新境地を切り開く姿勢を「一氣汎ゆ」に込め作品としました。坂本先生の御指導に感謝し、伊呂波書の会の先輩方を見習い昇格に恥じぬ様精進して参ります。

（鳳雪）



相馬美希
(宮城)

「光」

この度は、審査会員にご推挙いただき誠にありがとうございます。高校時代から師事している千葉蒼玄先生には心から感謝しています。

作品を書く時は、どの分野においても「芯があり、伸びやかな作品」を目指しています。まだまだ未熟ですが、これからも精進してまいります。

（美希）



金井みどり
(群馬)

「遣」

新審査会員ご推挙ありがとうございます。高校時代からご指導をいただいている倉林紅瑠先生はじめ、白玄会の諸先生や書友の皆さんに心より感謝申し上げます。

いつも作品構成に悩み、試行錯誤の連続です。古典の学習を大切にし、自分の課題を常に念頭におき精進してまいります。

（みどり）



小野寺久美
(宮城)

「源二の句」

審査会員にご推挙いただきありがとうございます。亡き恩師小野寺逢仙先生、そして熱心にご指導下さる熊谷宗兎先生はじめ諸先生方、書友のみなさんに心から感謝申し上げます。

詩情あふれる作品作りを目指として、書線を鍛錬する努力をしていきたいと思います。

（久美）

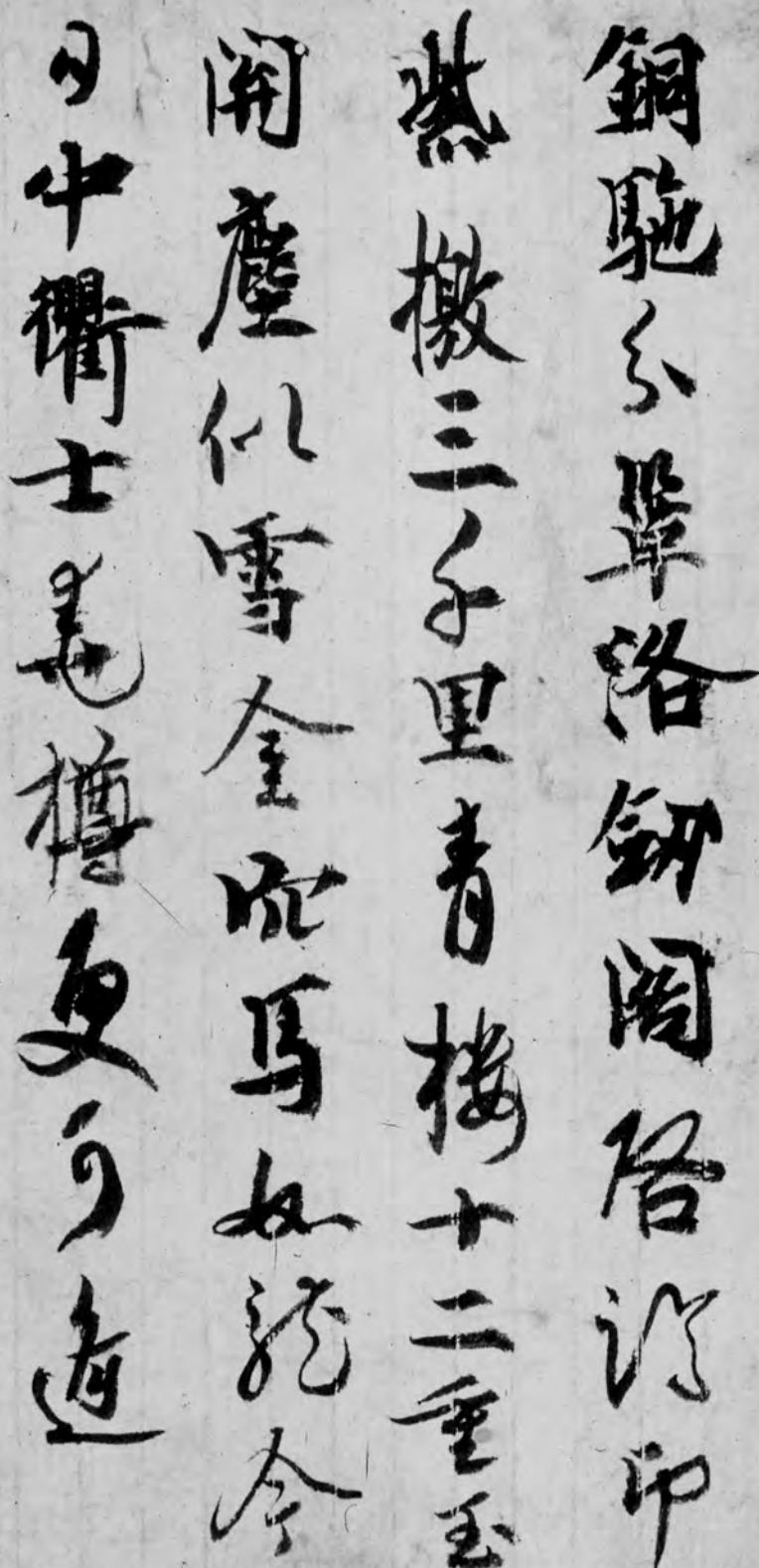
李嶠 雜詠残巻

平安 伝 嵐峨天皇 ③

特別研究部臨書課題

II (半紙普通判・縦使用) 左記の法帖より何文字臨書してもよい。

当該古典の左記掲載部分以外も可。



(掲載図版90%に縮小)

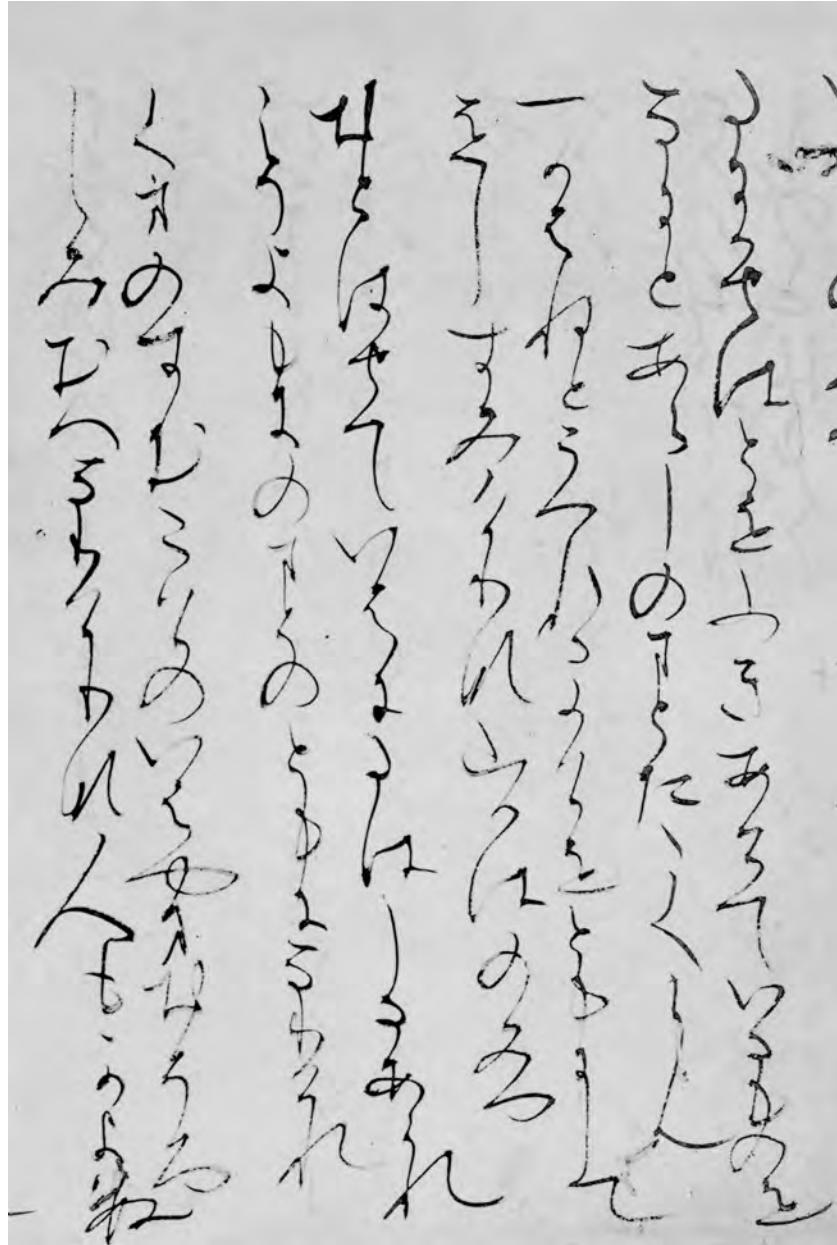
※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○臨（押印のみも可）

〈解説〉平安時代初期は、わが国が唐の文化を積極的に摄取し、新しい文化を創造する基礎を築いた時代である。この時代の能書である嵯峨天皇・空海・橘逸成の三人を「三筆」とよぶ。三人の書はそれぞれ個性的だが、その根底には晋唐の書の影響が色濃くうかがえる。正倉院の「東大寺献物帳」には欧阳詢の作品が記載され、また空海が入唐後に請來し嵯峨天皇に献上した品の中には「欧阳詢真跡一巻」が含まれ

ている。こうした事実から、この頃王羲之、王献之ほかとともに欧阳詢の筆跡も尊重され、当時の三筆ばかりがその書法を鑑賞し学んでいたことが推測できる。李嶠雑詠残巻は、嵯峨天皇の自筆とは考えられないが、料紙（縦簾紙）・書風から天皇の活躍した9世紀前半の頃の書写と推定されている。平安時代初期の欧阳詢の書法を伝える遺品として、またわが国に伝来した李嶠の詩の最古の写本として貴重である。（編集部）

(半紙普通判(料紙可)・縦長に使用)
別紙を裁断して貼付也可。半焼紙は半紙サイズに切って使用のこと。
上記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

(毎日展公募サイズ以内・縦横自由) 上記の掲載以外も可。



(宮内庁蔵)

よみ
にかぜはとをふきあけているものを
なにとあらしのまどたへくらん
つかひあつてのよみにかせはとをふきあけているものを
なにとあらしのまどたへくらん
おとはせでいはにたばしるあられ
こそよもぎのまどのともになりけれ
くまのすむこけのいはやまおそろ
しみむべなりけりな人もかよはぬ

<解説>

西行 (118 ~ 1190 俗名佐藤義清・法名円位)

は平安時代末期の歌人。若い頃は武芸に優れ、同年の平清盛とともに鳥羽上皇の警護を担う北面の武士にも選ばれたが、23歳の時に出家して全国を放浪した。花や月を好み「ねがはくは花のもとにて春死なむその如月の望月のころ」など多くの歌を残した。西行は藤原時代風の優美な仮名を書いた。眞跡には「品経和歌懐紙、御物の仮名消息、『宝簡集』」の消息がある。この山家心中抄のほか、一条撰政集、中務集、小大君集など、西行筆と伝えられる古筆は少なくない。山家心中抄は西行の歌集の写本のうちもとも古く、国文学史上においても貴重な資料である。

(編集部)

※古筆は原寸(以上も可)
※掲載図版は原寸大。

書芸文化新社「平安朝かな名韻選集」

※古筆は原寸(以上も可)
※掲載図版は原寸大。

辻元大雲

釣雪耕煙
(雪に釣り煙に耕す)



釣雪耕煙 よみ（雪に釣り煙に耕す）

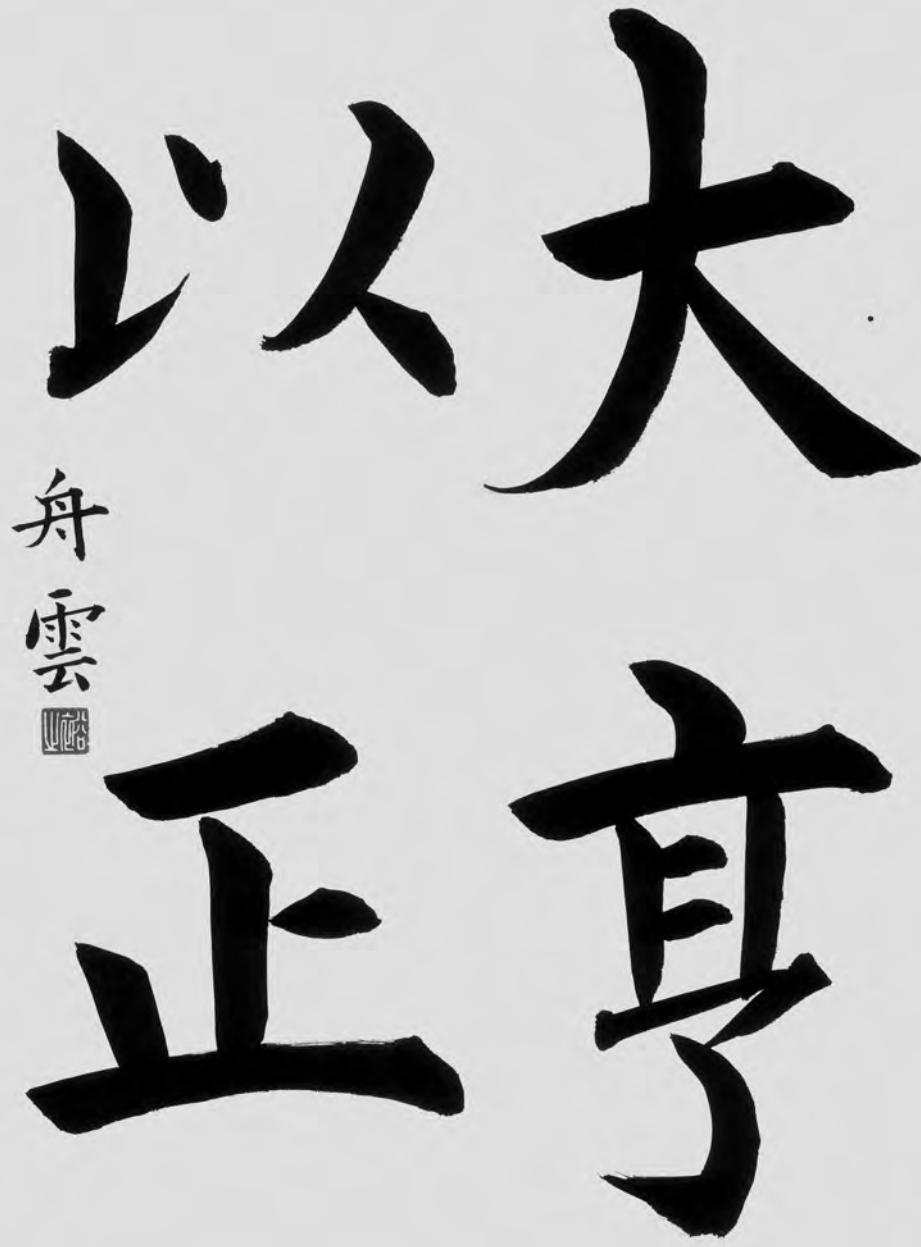
書体＝自由

雪の降る中で釣りをし、靄の立ち込める中で耕す。絶えず努力することの意です。少し草書をえて書いてみました。筆は羊毫中長鋒を使用しています。

「煙」は「烟」の草書体を使用しました。同じ意味の文字です。文字により活字体と筆写体による違いや、書写体への変化、行草書での変化もあり、様々な字形となる場合があります。また常用漢字体と旧字体との字形の違いは、書として表現する場合は書写体や旧字体を原則として使用する方が多いです。「声」は「聲」に、「沢」は「澤」になど知識がないと使えません。詩集の活字では常用漢字体であっても変えて表現する。漢字作品ではその方がよいと思いますが、現代詩文書作品などは悩ましいところです。

廣瀬舟雲

大亨以正
〔易經〕臨卦
(大亨以正)



「大正」の由来は『易經』の「大亨以正、天之道也」(大亨以て正しきは、天の道なり)からです。「亨」には「たてまつる・すすめる・とおる」の意があります。訳すと「(政)を大きく通すすめること正しきは、天然自然の道理である」となりましょう。大正時代というと、地震が多発する昨今、関東大震災を思い浮かべますが、大正15年までと少し短い時代でした。

王羲之の細楷の書法を加味して揮毫してみました。「亨」の異体字は、「高」と同様、上部を「はしご状」にしてその下に「子」を書きます。ここを「子」と書いてしまうと誤りですご注意ください。

習い方解説 (三)

鈴木せつ子

旅人とわが名呼ばれん初しぐれ
(芭蕉)

旅人

かのじとわが名呼ばれん初しぐれ

『野ざらし紀行』の旅の冒頭の句「野ざらしを心に風のしむ身かな」の悲壮感の句とは違い、運命づけられた者と誇りを持ち人々から旅人と呼ばれてみたいものだと、旅を楽しむ風情の句である。

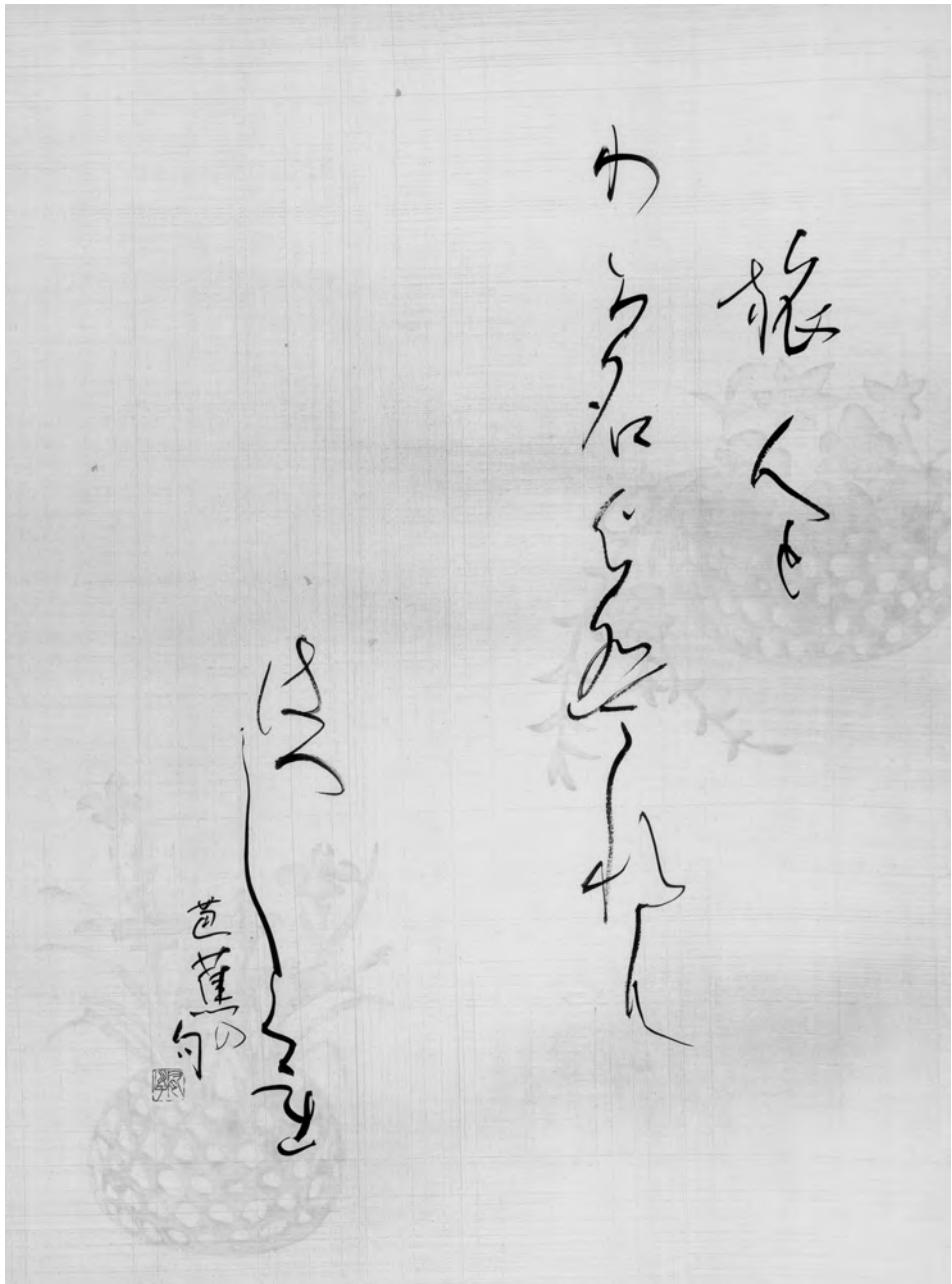
俳句は短歌より14文字少くならりますので、文字も大きく筆もやや大きく、そして執筆も少し高い位置が書きやすいでしょう。

かなの美しさは余白の美しさとも言えます。余白とは、余った白ではなく紙面の空間を考えた作品の散らし方、構成、演出等で出来る白い部分のことを指します。

又一行の流れの中に、横幅の広い文字、太細を組み合わせ、筆圧の強弱や遅速によって墨量の変化が生まれ、趣も変わります。作品づくりを楽しんでみて下さ

よみ方 旅人とわが(可)名呼(与)ば(盤)れん初(はつ)しぐれ(連) 芭蕉の句

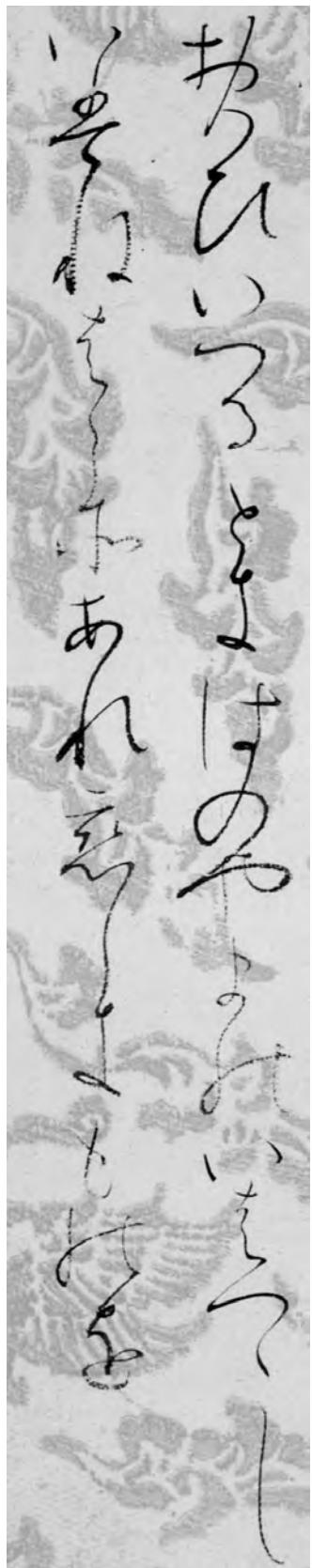
創作



かな規定 秀級以下【一月十五日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真的和歌を臨書する。または部分(2字以上の連綿)を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集
(掲載写真拡大123%)



よみ方 おも(元)ひいづるとき(支)はのやまの(能)いは(者)つつ(へ)じ
いは(盤)ねば(者)こそ(所)あれ恋しき(文)もの(能)を

かな条幅規定【一月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切(料紙可)

佐藤希雲選書

習い方解説 (三)

佐 藤 希 雲

たましひのたとへば秋の螢かな

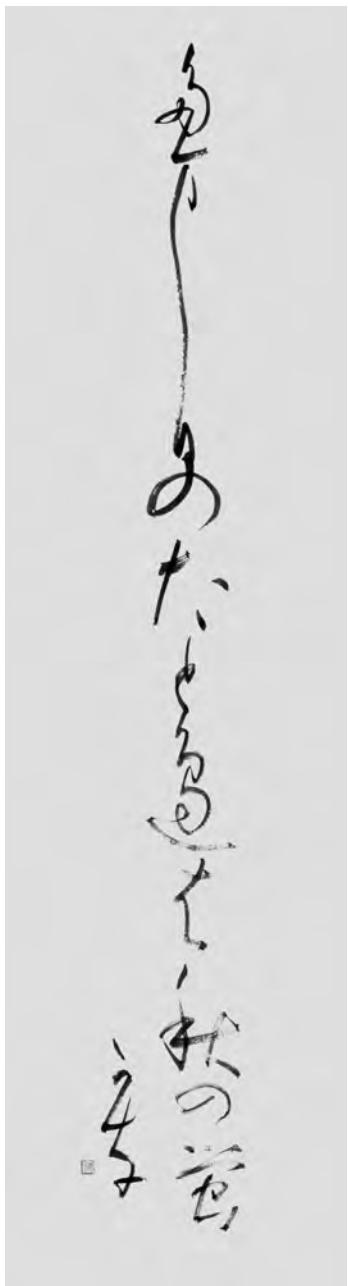
(飯田蛇笏)

「芥川龍之介氏の長逝を深悼す」と題された作品です。「一人は直接会ったことはないようですが、手紙のやり取りで親交を深めました。書き出しは中央やや右寄り、「し」をすっきりと伸ばし、後半に続けます。「かな」で墨継ぎをすると良いでしょう。

今回は羊毛の唐筆を用いました。
墨量の調整が難しいですね。

よみ方 た(多)ま(万)しひ(日)のたとへ(邊)ば(者)秋の螢か(可)な(奈)

創作



*タテ形式に限る

漢字条幅規定 初段以上【一月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切

小林琴水選書

習い方解説 (三)

小林琴水

今回は、筆先を利かせて、美しく流れるように書きました。線の太細の変化にも心がけて下さい。連綿線が多いと賑やかで、うるさくなるので出来るだけ空間でのつながりで続けていくことが、スッキリとした作品に仕上がるでしょう。



書体=自由

*タテ形式に限る

習い方解説 (三)

千葉蒼玄

漢字条幅規定 秀級以下【一月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切

千葉蒼玄選書

「滅多に訪れそうもないよい機会」

光明皇后の藥毅論は王羲之のものを臨書したものとされます。その書き方はかなり違い創作と言つてもよいくらいです。入筆と押さえの強さ、柔軟な線が表現できればと思います。

「載」は数を数える単位で、万、億、兆と同じですが、載は10の44乗、なんと1の後に0が44個も付く途方もない気の遠くなるような数のことです。



書体=自由



千載一遇
(せんざいいつぐ)



姑蘇城外寒山寺 夜半鐘聲到客船
(姑蘇城外の寒山寺 夜半の鐘聲客船に到る) (張繼)
(ちよけい)

千葉蒼玄

見越雪枝

初日のひかりやーー、
四方に輝く今朝のそら
君がみかげに比えづ、
仰ぎ見る、そぞろとけれ
千家尊福 一月一日 雪枝書

字配りよく書く為の要件として、紙面の天地・左右の余白の取り方も重要な要素だと言えます。

文字を読みやすくする為には、用紙いっぱいに書いてたり、余白を取り過ぎたりしないよう、上下や左右を均整にあけて書くと全体の調和がとれます。

今回は、皆さんご存じの唱歌、「年始めの例」とて、終わりなき世のめでたさを……」の2番の歌詞です。やや平板な点多く、漢字と漢字が続く箇所もあまりないので、余白の取り方に特に注意して仕上げてみて下さい。

又、口づさみながら楽しくペンを走らせてみては如何でしょうか。

※落款(自分の名前)を必ず入れる。

用紙=はがきの大きさ(14.8×10cm)、白色のもの、黒インク使用のこと(比え=たぐえ) 書体=自由

今月の

ホープ作品
各部総評 NO. 690

漢字部 師範 渋谷田美子

雁塔聖教序風で線質、字形、余白等細部まで心配りされ完成度の高い作。積み重ねた鍛錬の成果。

◎漢字部総評 上級は古典臨書を基礎とした多様な表現の作品が見られた。新たな書法へ挑戦した方もあり、好感が持てた。(萬城評)



かな条幅部 師範 重村 恵月



◎かな条幅部総評 漢字民、龍の曖昧な字が多出で残念。字粒の把握はかならしさを基本に極端な大きさは避けバランスよく。(明子評)

この明るさの中へ
ひとつの素朴な琴をおけば
秋の美くしさに耐えかねて
琴はしづかに鳴りだすだろう
八木重吉「素朴な琴」山房書



前衛書部 特選 山崎 恵

三分割した構成にそれぞれの意図を感じさせる。柔軟が持つ底力を訴えているように思う。

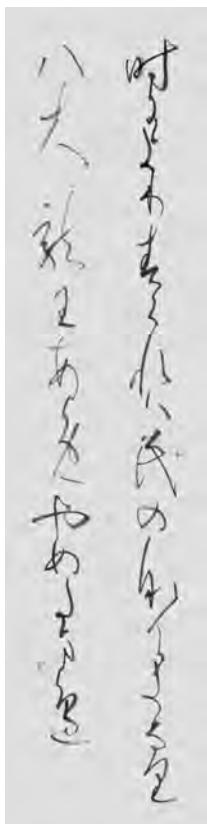
◎前衛書部総評 多種の用紙を使用し、穎やかな作品多く心地良さを感じた。メリハリも少し多めにとも思います。(慈香評)

◎現代詩文書部 総評 荒木 孝
白い半紙に現代書と音楽と宇宙の世界。叙情豊かで白と黒の空間が美しい作。

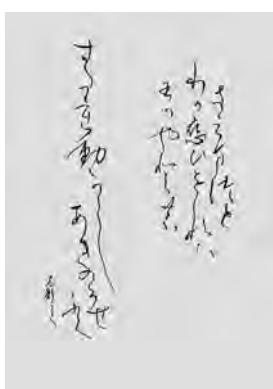
から受ける気持ちを大切に、多様な表現を期待する。(掃雪評)

ペン字部 師範 工藤 山房
柔らかな温雅さあふれる筆致で見事に詩意を表現。さらに構成余白で立体的な作品に仕上がった。
◎ペン字部総評 解説にあった「字配りよく書くためのポイント」を忠実に考慮し書き上げた作品多し。更なる研鑽を期待。(孝子評)

漢字条幅部 師範 鶯山 美梢
のびやかな中に安定感ある草書表現。柔毫筆の弾力を生かし、適度な渴筆がリズム感を生む。字も同様なれど要工夫。(大雲評)



この明るさの中へ
ひとつの素朴な琴をおけば
秋の美くしさに耐えかねて
琴はしづかに鳴りだすだろう
八木重吉「素朴な琴」山房書



漢字条幅部総評 上級2行書は書き慣れた表現が多く安定するが表現。柔毫筆の弾力を生かし、適度な渴筆がリズム感を生む。

◎漢字条幅部総評 上級2行書は書き慣れた表現が多く安定するが表現。柔毫筆の弾力を生かし、適度な渴筆がリズム感を生む。字も同様なれど要工夫。(大雲評)

今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 最首翠風 奥田瑞舟 白石和楓 倉林紅瑤

現代詩文書 (大拙社)

畠中成山
「海の風」



135×70cm

◆重厚な3文字。大字の
造形は創意にあふれてい
る。圧倒的なスケールで
強靭な線が魅力的。

(瑞舟評)

◆大胆な3文字。大字の
造形は創意にあふれてい
る。圧倒的なスケールで
強靭な線が魅力的。

(和楓評)

◆大胆な筆致の大字部と
左の小字部がよく呼応し、
存在感ある作品となつた。
書学の深さが表出してい
る。

(紅瑤評)

漢字 (秀恵) 阿部雅悠 「房中思」



180×60cm

阿部雅悠書

◆超濃墨に、ほど良い文字の大きさと流れで余白が美しい。字形が全て右傾している点に安易さがある。

(翠風評)

◆紙面を切る濃墨細線が美しく明快。3行目の後半部分は更に墨量と棲の広い文字も欲しい。

(和楓評)

◆長鋒羊毛筆を巧みに使い、よく鍛練された線が快いリズムを奏でている。行間の余白も美しく爽快さを感じさせる。

(紅瑤評)

◆紙面上部の潤渴、メリハリの利いた躍動感が目を引く。下部に細線が目立つので省略もありか。

(瑞舟評)

現代詩文書 (玄穹) 千葉紅雪 「文屋亮の詩」



千葉紅雪書

60×180cm

◆墨の入った文字の滲みと細線が見事に調和。ブロックの構成もいつもながら素晴らしい。明快で心地良い。

(和楓評)

◆紙を剪るようなシャープな線の現代感覚に富む作。詩情溢れる佳品である。

(翠風評)

◆細線とにじみを交差させた構成。墨色を変化させて、にじみの色を変えた力量に着目した。

(瑞舟評)

◆豊かな表情をみせる造形と相まって4集団の全体構成も見事。淡墨の潤渴の変化が快い作品。

(紅瑤評)

◆大字3文字の線と構成。墨色に創作意欲が漲る。風の下部、落款の位置は一考を要す。

(翠風評)

◆大字3文字の線と構成。墨色に創作意欲が漲る。風の下部、落款の位置は一考を要す。

(紅瑤評)

臨書 (白珠)

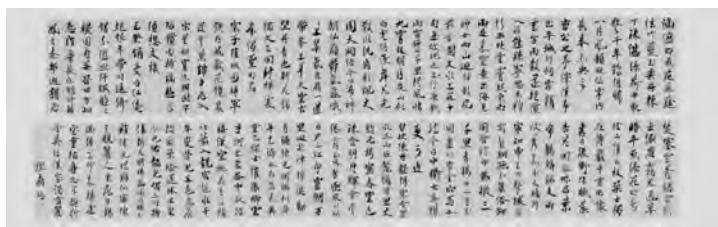
相内沙莉
「李嶠雜詠残卷」



相内沙莉臨

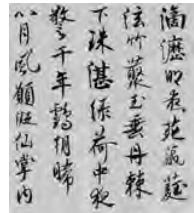
135×70cm

臨書 (千葉) 猪又理扇 「李嶠雜詠残卷」



53×175cm

部分拡大



◆原帖に似た形式で見事に臨書している。惜しむらくは紙質と墨への工夫だらう。努力作に拍手!

(翠風評)

◆原帖の特徴を良く捉え、最後まで貫した学書に敬服。紙に圧のかかる部分の表現が欲しいが用紙の為か。

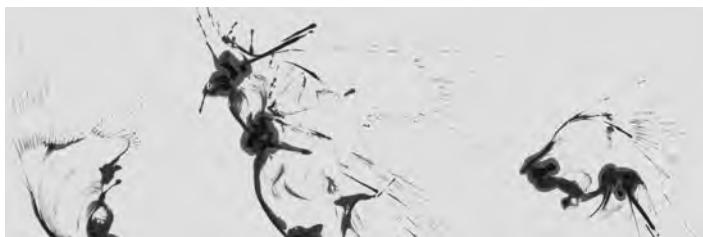
(紅瑤評)

◆古典・古筆を意欲的に学び、最後まで集中した臨書態度立派。さらに線を鍛え、五言律詩一首ごとの構成にも挑戦して下さい。

◆努力作。細字の多字作品を丁寧に完成させた。画仙紙と墨量の調節は難しいですね。

(瑞舟評)

前衛書 (容洲社) 阿部邑里 「小春日和」



60×180cm

◆飛沫の効果を生かし鮮烈な印象を与える作。3部構成から生まれる余白が美しい。中央部の渴筆がやや弱い。

(紅瑤評)

◆題名「小春日和」をイメージして楽しんだ。墨色への工夫にも時間をかけたに相違ない。

(翠風評)

◆左から右へのブロックへの飛沫が、リズム良く爽快で余白も美しい。左右の形と位置に変化をつけた方が良いのでは?

(紅瑤評)

◆軽妙なタッチで、明るく楽しい世界を創造している。にじみも美しく、踊るような気配を表現した。

(瑞舟評)

〔漢字〕
「かな」
游水荒川
〔現代詩〕
大雲松永
八戸市川
〔前衛〕
もく森田
藤谷
〔創作の部〕
〔特選候補者〕
「かな」
〔漢字〕
「かな」
游水荒川
空華
〔現代詩〕
大雲松永
宗苑
紫水
うる今関
心華
〔前衛〕
蓮紅
白珠
阿部
輝
〔漢字〕
「かな」
大雲江本
泰寿
千葉
玄象
大雲
千葉
名取
平野
山崎
金井
錦
〔臨書の部〕
〔漢字〕
「かな」
蓮紅
大雲
台原
吉田
遠藤
山崎
大友
和惠
恵香
紅彩
絢芳
月華
月華
舟月
昌子
匡子
月華
興舟

総出品点数
78点

漢字—16点
漢字—30点
かな—2点
かな—1点
前衛—21点
前衛—18点
現代—18点
漢字—0点
漢字—0点
かな—2点
かな—1点

◆原帖を丁寧に臨書して技巧。濃墨の為か「筋肉(11月号参照)」の表現され、原帖の重厚な部分も良く臨書している。

◆筆端の切れ味が上手に表現され、原帖の重厚な部分も良く臨書している。

◆ゆったりと筆を運んで、丁寧で悠悠と最後まで書き抜いた。良く筆が動いている。

（和楓評）

◆原帖を丁寧に臨書して技巧。濃墨の為か「筋肉(11月号参照)」の表現され、原帖の重厚な部分も良く臨書している。

◆濃墨で筆の弾力を十分に發揮し、骨力ある線条が見事な臨書。全紙4行の全体構成もよく充実した快作。

◆濃墨で筆の弾力を十分に發揮し、骨力ある線条が見事な臨書。全紙4行の全体構成もよく充実した快作。

（紅瑤評）

◆濃墨で筆の弾力を十分に發揮し、骨力ある線条が見事な臨書。全紙4行の全体構成もよく充実した快作。

◆ゆったりと筆を運んで、丁寧で悠悠と最後まで書き抜いた。良く筆が動いている。

（瑞舟評）

選評 稲垣小燕

今月のホープ作品



田中翠恵

漢字研究部 特選 田中翠恵

李嶠雜詠残巻、(伝 嵐嶽天皇)は歐陽詢の法に通じ、筆勢豪快で剛柔錯綜し変化の妙相俟つて、スケール大きく堂々とし品位ある格調高い秀作です。

◎漢字研究部総評



茱春泰正雅
孝
仙華瑛子泉

由山隆彩麻知
美
房扇華美子

春朱初政
翠
峰星江夫

美清明敦竹紅
紀風惠子葉霞

を極め品位に富んでいる。臨書するにあたっては筆を執るまでに、その法帖についての知識をもつことが大事である。ただ文字を書き写すだけでは雰囲気は伝わってこない。全体を執えて中身の濃い臨書をする姿勢を養うことで、格調高く品位を醸し出す書につながっていくのではないか。どうぞ。

李嶠雜詠残巻、(伝 嵐嶽天皇)は歐陽詢

か な 研 究 部
(山家心中抄)

選評 松村 くに子

今月のホープ作品



茂木絢水

かな研究部 特選 茂木 紗 水
字形、墨色ともに白眉。その運筆は古筆そのもの
という出来映えです。日頃の臨書に対する強い思い
真面目な姿勢がうかがえる秀逸作。

かな研究部成績表

芳椿 明昌 竹幸 竹蘭 砥こ 大墨 千長 華蓮 上白 若光 大椿 大前 前京 上蘭 は青高 北泉 一大 大青 倉千秀 春高 大泉 玉卯 青上 青土 正扇 竹
選外 蘭翠 漢苑 美扇 美鼎 水だ 雲宣 葉月 仙紅 泉露 松昭 阪翠 雲橋 泉鼎 せ 蓬陵 原会 葦雲 阪峰 吉葉 水汀 真雲 会川 月峰 泉峰 氣華 筆原
132 渡綿 吉吉 橫山 八森 宮宮 三真 松増 前本 本古 藤福 平日 春早 林長 沼丹仁 永中 中中 中戸 富渡 鶴續 伸高 高平 杉杉 新代
名氏 逢井 田山 木本 澤川 浦庭 重田 川田 多谷 江井 地山 高山 岡部 谷田 羽木 木村 田林 西江 村澤 子淵 田 原橋 番木 不平 伸田
氏名 稲千 無子 桥夕 とし か 美理 み 理 み 代子 伸田
略